

私が生きてきた道， そして思うこと

上野 カナエ

駐村研究員の任命を戴いてから三年になる。私に与えられた課題は「農村における女性の役割」であった。男女共同参画社会の形成がうたわれるこの頃、農村、都市を問わず、一人の人間としての生き方に価値観が求められる時代になってきている。

農家に嫁ぎ、農業を職業として暮らしてきた三十数年の生き方をふり返り、私自身どう変化してきたのだろうか、考えてみた。

私は二十歳、地元の農協に勤務し、農家の人達とかかわり、農業関係の本を目にし、先進地の事例を垣間見て、農業の未来に希望があると感じていた。酪農の事務処理に携わっていた私は、個々の農家の経済状態もある程度見ることが出来、農業もやり方次第で一千万台の売上、「八桁農業」も夢ではないことを知った。1966年頃のことである。

「農業で暮らしたい」、そんな夢を語る人と知り合い、私は実家から60km程離れた滝沢村の人となる。果樹園が1ヘクタール、2ヘクタールの水田と組み合わせで農業で生活できるかなと思ったが、現実には厳しいものであった。「暮らしたい」と「暮らせる」の違いをそのままに私は農家の嫁になった。夫の理想とは程遠く、我家は先代につくった負債が私達の肩に大きくのしかかり、身動き出来ない状況にさえあった。女の人は結婚することに依って、風習も環境も違い、知り合いさえも夫一人という状況に置かれる場合が普通である。結婚して間もなくは人格も理解されない。交流もない中で、状況を良くしようと嫁が意見を言ったり、目立つ行動を取ると又、大変である。家の中では話し合いが出来て動き出そうというのに、それは地域の中で弱い嫁の立場、苦しむことが良くあった。唯一救いは夫

の「オレが意見を言って貰って助かっているんだから気にするな」であった。四面楚歌の中で、それでも農業にかかわった二人の夢は着実に根をおろした。国の政策は農家の意志とかかわらず、ころころ変わったが、私達は稲作、果樹に養豚を取り入れ、自立の道を確認かなものにしていった。養豚を始めた頃、経営の基本は記帳が大事だと学び、実践してきた。記帳は私の仕事となり、数字から見た経営の方向を私なりの意見として言い、仕事のパートナー、共同経営者としての意識も高まっていった。苦しかった負債整理、家業のたてなおし、自立への経過を三十数年の経営簿からひもとけば、一目瞭然、農業を事業としてとらえ、経営してきたことが良くわかる。

養豚は、私達に経営安定をもたらしてくれた。果樹は季節の移ろいと自然の優しさを感じさせてくれた。稲作は日本人の食の基を私達が賄っているという自負心を養った。そして花卉栽培(ストック・りんどう)にも取り組んだ若き日々。四人の子供達はどっぴりとその生業なりわいの中で育ち、巣立っていった。

長男が大学を卒業する時、私達に言った。「りんご園を整備しておいて。十年後に農業をするつもりだから」。私達をほっとさせて彼は最初の職業に高校の教師の道を選んだ。

私達は加齢と共に無理なく、一生の仕事として取り組める作目として、又、後継者へ希望を託す作目としてりんごを選び、園の整備事業に着手していった。

りんご園の整備は思ったよりも素晴らしい出来映えで仕上がった。広々とした園地には千七百本の矮化の木、十七品種が植えられ、三年程で次々と実を結び始めた。

私は、ずっと夫にも言わなかったが、農家に嫁いだ女性は不利益や矛盾が多いことを強く感じていた。農業専業が夢という夫に協力し、「上野」という家の窮状を救うための嫁や妻の生き方はあっても、私個人としての生き方や評価は、全く表に出るものではなかった。農地の権利にしても養子縁組でもしていなけ

ればどんなに貢献度が高かろうと権利は発生しない。身近な年金問題、職業として意識してきた農業にかかわる「農業者年金」は妻には加入権利さえなかった。更に受給権利も経営委譲をした夫にしかない。当たり前といえば当たり前だが、長年の農業収入は二人で働いて二人で積み重ねたもの、二人で働いた収入の一部が掛金になっていることを思えば、厚生年金の遺族年金のようなシステムが農業者年金にもあって当然だと思えてならない。男性より平均寿命が長い女性が夫に先き立たれた後、最低の国民年金の受給権利しかないことは本当に淋しく悲しい話である。

農業者年金に関しては、平成七年に法改正があり、女性もある要件を満たすと農業者年金に入れることになった。しかし、土地の権利を取得するとか、経営協定を締結するとかの、条件付である。サラリーマンの妻と農家の女性を比べることに無理はあるが、矛盾はいっぱいある。職業と思った農業で年金を貰うことにこだわった私は、条件クリア（経営協定締結）して農業者年金に加入した。しかしわずか三年後、大幅な見直し、旧来の農業者年金制度は終止符を打つ。農業者年金がなくなった訳ではないが、積み立て方式に切り換えられ、専業農家が益々少なくなっている昨今、果たして新制度にどの位の農業者が期待をこめて加入したであろうか。決して改善整備された法律にはならなかったと思う。

「農家の嫁には働いてもどんなに経営が確立されても権利も何も発生しないね」とグチる私。夫は「家の中も外も自由にしているではないか」という。夫の言っていることと私の思っていることは微妙にというか、大きなずれがあると思う。「私にも働きに応じた分、下さい」ということを大きな声でいえないバリアも感じる。また、ある程度の年齢に達すると、そこに執着しなくてもいいと思う農家の生活の中での安らぎを見つけることもある。むずかしい。農業をするということは事業であるけれども、そこに生活を営む人々の地域

作りや協同の精神、環境を守ることにつながる大きなプロジェクトの中に個の経営があるとも思われる。

六年前、整備したりんご園にグリーン・ツーリズムを取り入れ、新しい農業の展開を始めた。りんごの木オーナー制、総合学習の受け入れ、気軽に入れる農村公園をイメージしている。バリアフリーをめざし、車イスのトイレ整備、りんご園内を車イスで散策出来る。老後、利用者としての私の姿もそこに想像する。最後までかかわっていただける農業の良さもここにある。

この展開に当たって、私は夫と「家族経営協定」を取りかわした。私のやりたいことを主体的に責任を持ってやること。報酬、資金の借入れや返済計画など、書面に表すことにより、具体的になり、仕事の分担もより明確になった。年間二千人の人がりんご園を訪れる。山菜を収穫したり、お花見、りんご狩り、りんごジャム作り、ソース作り、料理などで交流しながら、消費者の視点から農業者への期待感などを聞くことが出来る。

私がりんご園にグリーン・ツーリズムを取り入れてから、地域でもさまざまな取り組みがされるようになった。岩手山麓にある私の地域に移り住んできた人達が開く「工房まつり」に農産物を売るコーナーを設け、沢山の人の交流がはかられている。

私は開業してから六年間、春のりんごの花咲く頃、一ヶ月りんご園を無料開放している。りんご園は岩手の名峰、「岩手山」「姫神山」「早池峰山」がパノラマのように見える高台にあり、訪れる人の心をなごませてくれる。風も優しい、空気もおいしい、思いをこめて整備したりんご園からのサービスである。

昨年の春はこのりんご園に横浜から「ルアーとその家族」をお招きし、コンサートを開いた。地域の人達で作った「柳沢いいものまるごとネットワーク」という会で取り組み、五百人以上の人が訪れ、りんご園は終日にぎわった。伝統芸能「さんさ踊り」の参加もあ

り白いりんごの花に色とりどりのたすきが舞い一幅の絵にもなった。実行委員長の私は花にうずもれる暇も音楽に耳を傾ける余裕もなく一日が終わったが快い疲れで自己満足した。

昨年は後継者である長男の結婚が突然にあり、新しい方向へ一歩前進した年でもあった。農家にとって後継者が出来、経営委譲する手続きを開始することは嬉しい反面、大変なことでもある。夫が六十五歳までに後継者が勤めをやめて専業になるか、兼業でいくかは重大なこと。前にも述べた農業者年金の支給額にかかわってくる。夫が経営主でなくなると妻も又、同時に引退することになる。その時妻に特別な年金はない。というよりも夫との年齢差があればある程、国民年金の受給者ではなく掛ける側にいるということになる。

経営の間からは降ろされ、年金もない状態で夫の年金を頼る立場、やっぱり弱者だなあと思う。女性の自立をここでどう考えていったらいいか、私の場合はどうするか。

民法と農業政策のかみ合わせの悪いところだ。農家の五十代後半の女性にとって深刻な問題であると思うのだが……。それはそれとしてわが家では若夫婦が屋敷内に別棟を建てて住むことになった。ふだんの生活はなるべく干渉しないように。何かあった時は助け合えるように。適当な距離で仲良くやっていきたいと思う。経営委譲するまでに「経営協定」の見直し、息子夫婦との約束事を盛りこんだ新しい協定を結ぶことになる。

私達で出来ること、変えられるところから農業のあり方を示していくようにしたい。自分達の経験を活かして伝えられるように。

今、私の回りでは若い人達が農業に関心を持ち、取り組む姿が見られるようになってきた。無農薬、有機農法、スローフード、地産地消、言葉はいろいろあるが、確かな物を自分の手で、安全に作り、提供したいという心がそこにあると思う。地域の特産物を研究する活動も若い人達で動き出した。そばを栽培し、収穫後、手打ちそば、ヤナギバット、カ

ツケバット、そば豆腐など、現代風にアレンジして食卓にのせようと模索中である。

ピンクのそばを栽培し、花束にして売ったら人々の関心をひいた。これからの活用が楽しみだ。加工場や農家レストランを開くことに夢をつなげる。女性はしなやかに物事を考えられるというが、確かに今すぐ実現しなくてもがっかりしない。時機到来を待っている。実が熟すがごとくに。支援者として私も一緒にその過程を楽しんでいる。

私達が背負ってきた農家の嫁、女性の立場は少しは改善されただろうか。やはり口に出して言えるのは五十代も間近くなってからだろうか。

年一回県内で農業に取り組んでいる専業農家の五十代の夫婦で語り合う会をもっている。夫婦をもじって「風々の会」という。

それぞれの地でそれなりの作目で地域の先達となって一時代を築き、県の農村生活アドバイザーにも認定されている人達である。

生き方も含めて自信と誇りを持って農業に取り組んでいる姿はお互いの励みにもなるし、学ぶことも多い。夫婦で地域を担っているという自負、そして農に対する思いは夜更けまで語っても話題がつきることがない。

私自身、農業の内側から様々な思いや矛盾、価値観や喜びを受けたり、発信しながら、三十数年を歩んできているが、駐村研究員や生活アドバイザーの立場をいただき、外側に出たり、人に伝える機会がふえた。そのことによって自分への課題が又、ふえていく。

これからも更に物事に関心を寄せ、研修、研究を積み、地域の中で、楽しい暮らしを演出出来る人になっていきたいと思う。

(岩手県岩手郡・農業)